『21世紀に生きる』 1996. 10. 10. 発行 pp. 263～267 桐原書店

1996-27

文化国家日本の創造

東京工業大学教授
橋爪大三郎
Hashizume Daisaburō

文化は大事だと、誰もが口ではそう言う。

だが、心底そう思っている日本人が、たくさんいるとは信じにくい。

なぜなのか？

「文化が大事」と言っても、それは生活のうるおいという意味。文化は添えもの、生活があくまでも中心なのだ。そして、生活を支えているのは、経済である。誰もがそう思ったからこそ、日本は戦後五〇年、経済大国への道をひた走ってきた。ひた走って、ふと我にかえれば、どこかむなしい。そこで、文化は大事だと言ってみる。たかだか、その程度のことなのである。

日本は、経済大国である。にもかかわらず、いや、だからこそ、文化がみすぼらしい。文化はまっさきに考えることではなく、三番目か五番目にでも考えればよいことなのである。だから大学は

文化 国家

朝日新聞（夕刊） 1996年（平成8年）8月13日 火曜日 おまけ

今、『安全』を考える 6

日米安保再定義の夏に

文化

安全観

危機が多様化し複雑に
「個」と「社会」見直す時

ベッドの横にコピー機がなければ、本棚の下敷きになって死んでいたかもしれない。西宮市在住の作家・小田実さんは、阪神大震災の被災体験から「人間が安心して住める国」について改めて考えている。

「安全」の基本は非暴力だ、と小田さんは言う。「山を削り、海を埋め立て、超高層ビルを建てる。そうした乱開発による暴力的な町づくりが、地震で多くの『難死』者を出した。安全な町の条件とは、人間が歩くことを優先させた道、次に自転車専用の道があることだ。建物は周りを木に囲まれ、地にしっかりと足のついた三、四階建てぐらいがいい」

戦後「殺すな」の思想を主張し続けてきた小田さんだが、最近は「むしろ何が何でも『殺されてはならない』という視点が大事だ」と、思う。「『する』側でなく『される』側から考える、ということ。安全も全く同じだ」

従来の枠組みでは語れず

大震災、地下鉄サリン事件、そしてO（オー）157。日本の「安全神話」を崩す事件が次々と起き、改めて「安全」とは何か、がいま問われている。

「そもそも安全や、安全保障の概念自体が、いま大きく揺らいでいるんです」と、国学院大経済学部の古沢広祐教授は言う。「かつて安全保障といえば冷戦構造を背景に、政治的、軍事的枠組みで語られていた。しかし、いまや安全保障は人間のレベルから広義にとらえられ、平和の根底を支える環境、経済、社会、文化、健康など、包括的な意味内容を帯びるようになっている」。従来の枠組みの中では、もはや「対症療法にしかならない」ような課題が次々と出てきているからだ。

一方で、危機の予測も難しくなっている。「人間の予測・操作可能性が徐々にだが、確実に低下している」と、京都大経済研究所の佐和隆光所長は指摘する。「ひと昔前なら単純なモデルや計算式でかなりの確からしさが得られたものだが、病気でも、経済でも、予想もしない『化け物』が出てくる。不況が長引いているのも、政府の操作可能性が圧倒的に低下した表れだ」という。

安全の中身が変わり、危機の予測も難しくなっている状況に加え、日本人の「危機管理」の甘さも指摘されている。

東京工業大の橋爪大三郎教授（社会学）は「危機とは状況が変化すること、つまり過去の合意が覆されることです。ところが、日本社会の合意は、集団の置かれた特定の状況を自明の前提と受け取ることから出発しているから、危機の可能性を本能的に恐れる。恐れるから、それを言葉にして自覚することもできない」と話す。そのうえ「世界の大多数の国では、他人も他国も潜在敵なのだ、という意識がある。だが、日本人は同じ人間なのだから話せばわかる、安全も簡単に手に入る、と思っている。お人よしなんです」と、厳しい。

「衣食住」は満たされて

「安全にもルールや順序がある」

地下鉄サリン事件で、残留サリンガスの除去に向かう東京消防庁化学機動中隊員。新しい形の脅威に、日本中がおののいた（1995年3月20日、東京都千代田区で）

と橋爪さんは言う。「まず、自分で自分を守る。これがすべての基本です。次に家族が家族を、地域が地域を、そして国が国を守る。ところが日本人には、この順序の感覚がない。何か起こるとすべて人のせい、国のせいにし、守られるという視点があっても、守るという意識がない」

一方、文芸評論家で明治学院大教授の竹田青嗣さんは、先進国などではそもそも安全に対する人々の考え方が変わってきている、と指摘する。「人間の経済的、政治的行為を規定する社会の下部構造といえば、昔は衣食住、食べることや子を生み育てることだったんです。ところが現代社会、特に先進国では基本的なところはもう満たされている。そこで『エロスと安全』が労働や消費などの動機になっている」と言う。

エロスとは言い換えれば快適さ、便利さ、気持ちよさ、新しさである。「人々がこうしたものにどんどん向かっている。それと対になって安全もある。昔は安全といえば自己維持のためだったが、いまはより安全に、安全に、と防壁を何重にもすることに向かっている」

大震災やO157のニュースに日本中がパニックになる。昔なら防ぎようがない、と思われていた災害などを「何とか防ぎようがあるはず」とみるからだ。いろいろな保険が出たり、健康グッズやスポーツクラブなどがはやるのも同じことである。

竹田さんは「これは基本的には社会全体の生活条件が良くなっているいい兆候だ」とみる。だが、安全もエロスもその本質は「もっと、もっと」。つまり「あてどがなく、ここまで手にいれれば大丈夫、という達成感がない。しかも一度あるレベルに上がると後戻りができず、落後する恐れが常につきまとう」問題点がある。

さらに「安全やエロスを追求する社会は、まだ『生存』という基本的な下部構造を必死に追求している社会に対して、後ろめたさや負い目がある」。経済的に貧しい国は、せっぱつまれば「戦争をしてでもがんばろう」と思うかもしれない。「下部構造の質の格差が開けば開くほど、世界全体の安全が難しくなる」と、竹田さんはみる。

「ひとりよがり」脱却を

後戻りができないなら、どうすればよいのか。竹田さんは「エロスと安全の思想」をもつ必要性を説く。「他人を利用し、自分だけが気持ちいい、安全だ、というのではあてどがなく、うしろめたい。お金さえ出せば安全が買える、という競争になってくると、安全はひとりよがりになってしまうんです。その社会の成員すべての安全のレベルを上げていく、そうした一般的な条件として安全を考えていかないと」。つまり、エロスや安全の「社会化」だ。

私たちの求める「安全」とは何か。「もっと、もっと」から、少し立ち止まって考えてみる時にきている。

（大原 悦子）

＝おわり

オンボロになり、教育は荒廃し、それを誰も不思議だと思わない。

＊

文化とは、いったい何だろう。

文化という場合、少なくとも二つの意味を区別しなければならない。第一は、高級文化（ハイ・カルチャー）という意味。芸術や宗教、科学などの、いかにも「文化」といった活動がこれにあたる。第二は、とにかく人間の行動パターンという意味。文化人類学が、それまでの文化の概念を拡張して、用いた言い方である

日本語で「文化」と言えば、ふつうは、前者（高級文化）の意味である。

江戸時代の日本は、世界的に見てもユニークな文化をそなえていた。けれども明治の人びとは、欧米世界と接触してみて、自分たちの文化など欧米の基準からすれば、「文化」の名に値しないことを発見した。（そのころ、「異文化を大事にしましょう」と言ってくれる、文化人類学などという学問はまだなかったのだ。）そこで彼らは、チョンマゲを切り、肉を食べ、洋服を着、学校を建て、軍隊を作り、法律や科学技術をせっせと西洋から学ぶことにした。

その選択は正しかったと言えるだろう。だがそのために日本人は、自分たちの文化は価値がなく、恥ずべきものだと思うようになってしまった。歌舞伎や能や、茶道や生花や舞踊や、キモノや寿司や日本庭園や、……外国人に「ワンダフル」と言ってもらえたものは、そうかなあと思う。それ以外は、文化のうちに入らないのである。

日本には、自分たちの基準で日本の文化を評価する仕組みがない。絵画でも音楽でも学問の世界にも、国内巨匠、国内大家がひしめいている。しかし彼らは、家元と同じで実力がなく、国際的にまったく通用しない。一方若手は、どんなによい仕事をしても、外国で賞でも取らない限り認められない。基準を外国（西洋）に置いたままだから、日本で誰かが創造的な仕事をするなど、考えてもいないのだ。

＊

文化とは、いったい何だろう。

文化とは、生きるに値する人生のスタイルのことだ。

日本人一人ひとりが、自分の人生のスタイルを大事に、それに自信を持つこと。そこから、すべてが始まる。

そのうえで、政府もそれを支援するよう、大胆に政策を切り替えなければならない。

科学技術に話を限っても、やるべきことはいっぱいある。

昨年成立した科学技術基本法は、日本の「科学技術創造立国」をうたっている。本気でそれをやる気なら、日本をアメリカに匹敵する、世界最高水準の科学技術のメッカにしなければならない。これを失敗すれば、日本は経済大国の地位をすべり落ち、じり貧になるのは目に見えている。

そこでまず、世界の才能を集め、思う存分に研究してもらえる環境を作る必要がある。いまの日本の大学は、あまりにレベルが低いので、専門学校に格下げするか、「大学清算事業団」にでも移

管する。そしてゼロから大学をつくり直したほうがいい。

次に、うんと予算をつける。もちろん、ただ金をばらまくだけではだめだから、大学や研究所をしっかり管理するアカデミック・マネジメントのシステムや、大胆な競争原理を採り入れる。日本人だろうと、外国人だろうと、立派な研究成果をあげれば研究費をはずむ。だめならお払い箱にする。そんな緊張感が、創造の現場には不可欠なのだ。

まず手はじめに、日本の研究職をオープンにすること。国民がこの意義を理解すれば、これからの日本文化も捨てたものではないかもしれない。

橋爪大三郎／はしづめ　だいさぶろう
1948年、神奈川県生まれ。
72年東京大学文学部社会学科を卒業後、77年東京大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程修了。フリーで執筆活動を続けた後、89年東京工業大学助教授に就任。
現在は東京工業大学大学院社会理工学研究科教授。
専門は社会学。
主な著書に『大問題——Q＆Aでわかる世紀末ニッポン』（幻冬舎）、『性愛論』（岩波書店）、『橋爪大三郎コレクション全3巻』（勁草書房）などがある。